

MY SOCCER L I F E

n a o m i

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、ある1人のサッカー選手のサッカー人生を描いた物語。

目次

1 2 歲。 秋	8 歲。 秋
7	1

8歳。秋

ピッピッピ

ホイッスルが鳴ると同時にスタジアムからサポーターの声が聞こえてくる

「キタガワ！キタガワ!!」

さっきまで白熱した試合を繰り返していたグラウンドに、1つの台が設置された。

俺はサポーターの声に導かれるようにその台に向かった。

思い返せばあつという間のサッカー選手としての人生だった。

プロデビュー戦での決勝ゴール、チーム優勝に貢献しMVPの獲得、苦節の続いた海外挑戦。W杯にも出場した。

なによりあの人と同じフィールドでサッカーが出来た時は、試合前から号泣した思い出を噛みしめ台に向かう。

反対側のベンチに座るあの人はどんな気持ちだろうと見てみると、涙目を必死に堪えていたから少し笑えた。

台の一步手前で立ち止まる。

（あの人の一言が無ければ、今の俺は無かったんだよな…）

うつすらと涙を流しながら台に昇って俺はマイクを通して叫んだ。

「私。湘南イーグルスの北川優は引退します…」

「坊主、サッカーやらないか」

河川敷で一人座る小学生の俺に、あの人は声をかけてきた。

「おじさん誰」

「この歳でおじさんって言われるとは、思わなかったぜ」

苦笑いしていたあの人は確かにおじさんではなくお兄さんだった。

「楽しいぜサッカー」

「僕サッカーよくわからない」

「俺が教えてやるよ」

そう言ってテクニックを披露するあの人は格好良かった。

足であんなにもボールを操れるものなのかよと子どもながら思った。

「すげー…」

「なっ、どうだやらないか」

そうやってあの人はパスを出した。そういえばあの時初めて人と遊んだっけ。

初めてのパス交換は俺の一方的な質問攻めだった。

「おじさん何してるの」

「俺は山下巧。サッカー選手だポジションはMF。横浜FCに所属している」

「なんで僕に声をかけてきたの」

「坊主いつも一人でここにいんだろ」

「この河川敷ランニングコースだから坊主のことよく見かけるんだ」

「別に声をかける必要は無い」

「悲しそうに座ってるヤツを見捨てられないのが俺だからよ」

「よく見かけるってことは何回も見てたんでしょ」

「えっ。あつそれは…その…そうだな」

「同情ならいらナイよ」

強く蹴ったボールを背に俺は立ち去る。

「俺はここで待つてるからよ。またサッカーしようぜ坊主」

そう言ったあの人を振り返って見ることに無く走り去った。

その夜は寝つけず。気がつけば毎日河川敷であの人とサッカーをしていた。

サッカーと…いやあの人と出会って3ヶ月が過ぎた。毎日のようにあの人と河川敷でプレーしていたからか自然と上達し同級生とサッカーをすると、いつも俺の取り合いになった。

両親も最近明るくなつたと安堵している。

そんな充実した日々になりつつあるある日のこと

「坊主。そういうえばお前、サッカーの試合観たことあるか」

あの人はボールを蹴って問いかけた。

「いや…見たことない」

俺は少々後ろめたそうに返答した。

「今度、俺の出場する試合が神奈川TVで放送されるからよ。観てみな」

そんな俺を気にもせずあの人は笑顔でそう言った。

「あつそ…暇だつたら見るよ」

「この生意気なガキめ」

そんな会話のあと普段通り練習した。

練習を終え家に帰りすぐにパソコンで調べた。

（明後日か…）

ナビスコ杯決勝。横浜FCVSフレッシュ広島と書いてあり。当然あの人はスターティングメンバーだった。

興味本位で調べてみると、横浜FCは13年前にリーグ優勝して以来タイトルから遠ざかっている古豪チームらしい。そんなチームが横浜FC一筋6年の司令塔『山下巧』

を中心に躍進しナビスコ杯は6年ぶり決勝進出。リーグ戦も残り5試合を残して首位と勝ち点差3の2位と今年は勝負の年と書かれていた。

そうした情報を調べていくうちに俺は『Jリーグ』に興味を持った。

ナビスコ杯決勝当日。俺は家のTVの前に座り込み試合開始を待っていた。

「サッカーなんて、珍しいモノ観るわね」

母が洗い物をしながら話しかけてきた。

「そうかな。最近よく一緒にサッカーするお兄さんからこの試合観たほうがいいって言われてさ」

「そうなんだ……」

その時の母の困惑した表情を当時の俺は気にしていなかった。

そうこうしているうちに試合が始まり、俺は食い入るように観た。

あの人は輝いていた……いや輝き過ぎていた。

美しいパスにキレのあるドリブル、熱く激しいディフェンスに強力なミドルシュート。横浜FCのシュートにほとんど絡んでいた。

結果は3対2で横浜FCが18年ぶりのナビスコ杯優勝。

あの人は1ゴール2アシストの決勝点を決める大活躍で大会MVPに選ばれる文句無しプレーだった。

その後の俺はあの人のプレーを真似するかのように夜遅くまでボールを蹴り続けた。

12歳。秋

山下巧

27歳

横浜FC所属のMF

神奈川県にある高校サッカーの名門『京浜学園』で1年生の頃からレギュラーとして活躍し2年3年と高校サッカー選手権大会連覇に大きく貢献し、2年の時はMFながら得点王。3年の時にはアシスト王と大会MVPに輝き即戦力として

横浜FCと18歳でプロ契約。なかなか結果を残せないチームの中でアシスト王に2回。5年連続でベストイレブンに選出中と活躍。世代別日本代表にも選ばれた。

A代表デビューが20歳の時で日本代表として50試合出場し通算20得点32アシスト。

『フィードルの支配者』の異名を持ち。海外クラブからのオファーも多数届いていると噂もある。

これが、あの人のサッカー選手としての経歴だ。

これだけ凄い人と毎日サッカーをしていると思うとワクワクが止まらないわけだが、

当時俺は疑問に思っていたことがあった。

何故、海外サッカーへ挑戦しないのか

海外のクラブ特に欧州のクラブは誰もが憧れる場所であり自分を高める絶好のステージだ。噂によれば日本の素人でも知っていそうな名門クラブではないもののCL（ヨーロッパチャンピオンズリーグ）に出場するような強豪クラブから複数オフアークがきているらしい。

その疑問を本人に直接聞いてみると「クラブには凄く世話になったからリーグ優勝をするまでは、このチームを離れない」

と言っていた。当時は意味を十分には理解出来なかったが、後にいかに重い意味をもつものなのか知ることになる…。

あのナビスコ杯決勝を見て以来Jリーグに興味を持った俺は毎週TVで試合を観るようになり、練習後あの人と語り合うようになった。おかげで夜遅くなり両親に説教されることもしばしばあった。

家は学者で大学の助教授の父と母と小学1年の弟3歳の妹の5人家族どこにでもいる普通の家族だが、両親はどうも俺がサッカーをやることに反対のようで、家でサッカーの話をする和不穏な空気になる。

「遅かったな…」

新聞を読みながら無言の圧力をかけてくる父

「やるのは勝手だが、迷惑かけるなよ」

階段を上がろうとすると父は呟く。

「わかった」

小声で呟き階段を上がる。

「お帰り。遅かったわね」

母は妹と風呂に入っていたらしく濡れた髪を靡かせ、優しく声をかけてくれた。

「あのさ……例のお兄さんから試合のチケット貰ったんだけど母さん一緒に来てくれな
い」

母はサッカーに対して否定的な目で見ている面もあるがどんなことでも相談に乗っ
てくれる。

「私じやなきやダメなの」

母は困った表情で問いかける。

「父さんは母さんも知ってのとおり大のサッカー嫌いだし、友達は皆用事があつて断れ
たし頼めるのが母さんしかいないんだ」

「そう……考えておくは、おやすみ」

階段を降りる母の背中は悲しそうだった。

翌週。俺は初めてスタンドでサッカー観戦をすることになった。交渉の末なんとか母に連れてきてもらうことに成功した。

試合はリーグ戦最終節でリーグ優勝のかかった大事な一戦であった。相手はJリーグの中でも屈指の強豪クラブ鹿島ファイターズ。1位と2位の直接対決：まさに天王山なわけだ。

スタジアムに入り見た中の景色は最高だった。綺麗な緑の芝に席を埋めつくすサポーター、全てが新鮮であった。そして母の表情がどこか懐かしそうなのが印象的だった。

当時凄く印象的な出来事もこの時起こった。スターティングメンバーの発表を聞いた時に母の顔が青ざめ、試合開始を前にフィールドに出てきたあの人が見て俺の言うサッカーのお兄さんと知った時、とても複雑な気持ちだったのか母の表情がこわばっていた。

試合は0対0のまま緊迫した展開が続いていた。キーマンであるあの人に常に複数のマークが付き、思うようなプレーが出来ないでいた。そして後半になるにつれチームの要を抑えられた横浜FCは防戦一方になり始めていた。

後半ロスタイム。相手の攻撃をシャットアウトしたチームメイトがあの人にパスを出す。カウンターのチャンス：あの人がボールを持った瞬間思わず「いけー」と叫んだ。

その声が聞こえたのか一瞬こちらを見て次の瞬間に出したロングフィードは

その場にいた全ての人の時間を数秒止めた。

美しく伸びて進むボールはあの人のパスを信じて走り込んでいたチームメイトの足元にドンピシャで吸い付いた。センターリングが上がるとセンターサークルから走り込んでいたあの人が勢いそのままにヘディングシュート。ボールはゴール左隅に入りそれと同時にホイッスルが鳴った。

あの瞬間、隠していた本当の力を一瞬発揮したようにあの人を間近で見続けてきた俺は感じた。そして俺は優勝決定に喜ぶチームやあの人以上よりもとても懐かしそうに号泣する母の方が印象深かった。

「おっ、優。観に来てくれたのか」

優勝セレモニーを終えたあの人が気づいて話しかけてきた。

「おめでどう。ヒヤヒヤしたよ」

「だな」

とびきりの笑顔で俺と話し続けた。

「1人で来たのか」

「母さんに連れてきてもらった」

「優のお母さんか。どこだ」

「あの柱の下で俺を待ってる」

と言ったころには、すでに母のもとへ向かっていた。走って追いかけるとただならぬ雰囲気を感じた。小さな声で

「里穂…」「たつくん…」と言っているような気がした。

「貴女が優君のお母様ですか。はじめまして山川巧です」

「優の母の里穂です。息子がお世話になっております。今後よろしくお願いします」

そう言ってお互い反対方向へ立ち去っていった。小6の俺でもわかる不自然なやり取りだった。

数ヶ月後。母に無理を言っただけで欧州クラブに移籍することになったあの人を見送るべく、空港まで送ってもらった。

リーグ優勝とこの年の年間MVPに輝いたあの人にとって、欧州への挑戦はごく自然で当然なことなのだが、あの人とサッカーが出来なくなる寂しさは、この日まで毎日のように一緒に練習しても晴れなかった。

「見送りに来てくれたのか」

「うん…」

静かな時が流れる…

「いいか。俺は向こうでもっと大きくなってくるからよ、優はもっと上手くなって同じ

ステージに來い。次にプレーする時はお互いプロ選手としてだからな」

「わかった。俺絶対プロになるから…約束だよ」

「おう。またな」

そう言つて遠くにいた母に軽く会釈する動作をし、勇ましい背中を向けて海を渡つた。